

# カナダにおけるメディアリテラシー教育の生成と展開 —メディアリテラシー教育の動因としてのアイデンティティーの形成—

近 藤 聡

## 1. 本研究の目的

研究の目的は、メディアリテラシー教育の原理原則を解明し、原理原則の応用として、日本の国語科教育のメディアリテラシー教育への示唆を提言することにある。

そのために、カナダの英語科教育におけるメディアリテラシー教育を研究対象とした。ここでいう英語科とは、カナダにおいては国語科のことである。また、本稿で研究対象とした4通りのカナダの学習指導要領は、すべてインターミディエイト以上のものであり、日本の中等教育に該当する。

オンタリオ州のカリキュラム

第1学年～第3学年：プライマリー                      第4学年～第6学年：ジュニア  
第7学年～第10学年：インターミディエイト      第11学年～第13学年：シニア

## 2. 本研究の仮説と研究の方法

本研究では、カナダ・オンタリオ州のメディアリテラシー教育の生成と展開について、次の3点を明らかにすることをめざした。

- 1) メディアリテラシー教育を支える言語観と言語教育観を明らかにする。
- 2) メディアリテラシー教育の教育目的の本質的要素を明らかにする。
- 3) メディアリテラシー教育の教授行為の本質的要素を明らかにする。

さらに、1)～3)を明らかにし、可能な限り、その成果から日本のメディアリテラシー教育への示唆を得たいと考えた。したがって、最終的には、次の4)を明らかにすることをめざした。

- 4) 日本のメディアリテラシー教育への示唆を提案する。

筆者は、本研究においてカナダのメディアリテラシー教育の生成と展開はカナディアンアイデンティティーの形成が動因であったという仮説を立てた。メディアリテラシーを発達させた動因はこの点にあったと筆者は考えている。研究方法は、主に文献研究によって仮説を設定し、検証していく方法をとった。加えて、2005年10月にカナダ現地調査をおこなった。

## 3. 本研究の成果

本稿では、実践面のうち教育施策に重点を置き、1969年<sup>(1)</sup>・1977年<sup>(2)</sup>・1984年<sup>(3)</sup>・1987年<sup>(4)</sup>

のオンタリオ州教育省の学習指導要領および指導指針から検証した成果を論じた。

1987年の改訂は、メディアリテラシー教育をカリキュラムに位置づける画期的なものであった。1987年の後の改訂は1995年と、1997～2000年におこなわれた。また、2006年9月にGrdes 1-8の改訂がおこなわれた。本稿では、1960～1980年代のものに研究の対象を限定した。メディアリテラシー教育の原理原則は、88年の「メディア領域」導入に顕著に現れているからである。研究の成果として、カナダのメディアリテラシー教育を成立させた言語観、言語教育観、教授行為の本質がどのように継承され、さらに発展を遂げたかを示していく。

### (1) 言語観、言語教育観が、メディアリテラシー教育を支えている

カナダ・オンタリオ州教育省の学習指導要領の言語観、言語教育観にはきわだった特徴がある。これが、カナダの言語教育を特徴づけ、メディアリテラシーを成り立たせたと考えられる。

#### 1) 言語で世界を認識するという言語観

77年版も87年版も、「世界についての認識や理解は言語によって深められる。<sup>(5)</sup>」「周囲の世界とのつながりをもつことを試みる手段として、(中略)言語を用いる<sup>(6)</sup>」という言語観は共通している。この言語観が学習指導要領に現れたのは、69年版からである。69年版は、英語科教育で学ぶのは科目内容ではなく、「自己の形成」「コミュニケーション力の育成」だと教育目的を転回した。

一方、言語とは何かという考え方は80年代とそれ以前で大きく異なる。言語とは、69年版と77年版では、リーディング、ライティングの分野のいわゆる言語であり、文学であった。メディアを言語だとしたのは、84年版の指導指針からで、言語を言語、文学、メディアの3つの領域に分けたのは87年版からである。マスメディアの発達に伴い、言語で世界を認識し理解するにはメディアを独自の言語領域として扱うのが必然になったと考えられる。あるいは、アメリカ発のメディアを対象としてメディアリテラシーを発達させるのが、カナダ人の言語教育として必然性をもっていたともいえる。

#### 2) 言語で自己を形成し、アイデンティティーを形成するという言語観

1)の言語観に基づく、自己を形成しアイデンティティーを形成するという言語教育観は、69年版から始まり、77年版でさらに明確になった。77年版は、「言語によって、社会認識、自己認識をする」という言語観および言語教育観を示した。これにより、77年版は自己の形成にかかわる教育目的の社会性が強まり、アイデンティティーの形成を打ち出し、用語としても記述した。

87年版の「情報時代において自己の人生設計を補助する技術と知識を養うことになる<sup>(7)</sup>」などの主張は、69・77年版から継承した自己の形成をメディアリテラシー教育の大枠の教育目的としたものと考えられる。87年版には「アイデンティティーと国家の統一について、文学とメディアの授業では(中略)文化を観察して理解する<sup>(8)</sup>」という記述もある。メディアリテラシー教育によってアイデンティティーを形成するのは、69年・77年版からの継承と発展であったと考えられる。

#### 3) メディアは言語であるという80年代指導指針と学習指導要領の言語観

87年学習指導要領では、「英語あるいはその他の言語の学習内容とは、言語、文学、およびメディ

アである<sup>(9)</sup>」とある通り、3つのカテゴリーを対等に扱っている。これに先立つ1957年に、カナダのメディア学者マクルーハン（1911-1980）はメディアリテラシー教育についての論文「壁のない教室<sup>(10)</sup>」（1957）で、メディアを新しい言語であるとして、この新しい言語を学ぶことが必要だと次のように提起した。

○今日、我々は、新しいメディアは幻の世界を作り出す単なるトリックではなく、新しい独自の表現力をもった新しい言語であると気づき始めている。（中略）もし、これら「マスメディア」が、言語と視覚的文化のこれまで人間が獲得してきた水準を低くしたり破壊したりするのを助けるばかりなら、その原因はメディアに何か本質的な問題があるからではない。その原因は、我々がメディアを、すべての文化遺産の中にやがては統合していくための、新しい言語として咀嚼できていないからである<sup>(11)</sup>。

30年が経過した後に、マクルーハンの主張通りに、87年版でニューランゲージもオールドランゲージも同じ言語として位置づけられたのである。

## (2) 教授行為の精神：徹底して学習者自身が考える体験をさせる

教授行為の特徴は、学習者が判断する授業のプロセスを保証するために、ダイナミックイングリッシュとホリスティックリーディングによって考える体験をさせるところにあった。

### 1) ダイナミックなプロセス

69年版がはじめてダイナミックイングリッシュを標榜した。これ以降、77年版も、87年版も同様であった。69年版は、活動を通して効果的な学習ができ、学習者自身が主導する学習が理解を定着させるという研究成果を根拠にしている。学習者発見の原則にそっている。

### 2) ホリスティックリーディング（全体的理解）

メディアリテラシー教育はホリスティックリーディングでおこなう。

おこなうための本質的要素がある。

第一に、全体像を認識するための論点を洗いだす。

第二に、全体像を認識した上で、認識の結論を学習者が出す。

また、学習経験は複数回繰り返すことで、より有効になる。この理論的背景は、ブルーナーのスパイラル・カリキュラム<sup>(12)</sup>によっている。

「ホリスティックリーディング」という用語は、87年版ではじめて登場した。87年版は「因果関係の把握、意味を汲み取るヒントとしての文脈の把握、そして連続した事象の理解」「視覚言語の要素は、単独には存在せず、組み合わせられてはじめて存在できる」というように全体的、総合的に理解するように提案している<sup>(13)</sup>。マクルーハンが線的思考を分節的、分断的だとして否定したのと通じている。

87年版の「技術用語で圧倒せず、読解力を養い、ビューイング習慣を意識できるようにすべきである」という主張は、たとえば総務省のメディアリテラシー教材（平成16年度公募）「映像不思議シミュレーター」<sup>(14)</sup>のような、カメラアングル、構図、音響や照明などの効果や技法を教えるのに偏った

日本のメディア教育への批判、提言になりえる。

#### 4. 1960～1980年代における学習指導要領の継承

87年版の学習指導要領の「州における教育全般および英語プログラムの目標<sup>(15)</sup>」は、教育課程のコース内容と必修科目を定め、英語科にメディアを取り込み、3つの領域を位置づけた。

英 (イ ン グ リ ッ シ ュ 科)	I. 言語領域
	II. 文学領域
	A. 詩
	B. 散文   フィクション C. 散文   ノンフィクション D. 戯曲
	III. メディア領域

これまで言語と文学の2領域であった英語科は、メディアを加えて3領域となった。これにより、メディアリテラシー教育はメディア領域でおこなわれるようになり、必須の教科内容となった。

第7学年から第12学年の英語学習指導要領の中で、メディアリテラシーがその内容を構成する一領域として位

置づけられることになった。

69年の改訂は、教授行為を「学習者発見」の方向に転回した。さらに教育目的を、従来の教科内容よりも、学習者の「自己の形成」に置いた。77年の改訂は、「言語によって、社会認識、自己認識をする」という言語観を明確にし、教育目的の社会性を強め、言語教育観の社会性を強めた。

以上は、87年の改訂でも継承され、メディアリテラシー教育の導入に結びついたのである。

##### (1) 学習者発見の原則による、ダイナミックイングリッシュの標榜

69年学習指導要領は、英語科教育を大きく転回するものであった。

それまでの伝統的な英語科教育は、英語の規範文法や正しい発音を習得するのを重視していた。ところが、69年学習指導要領は、正規の文法教育と言語能力の向上には相関関係はないとして、伝統的な英語科教育の立場を否定したのである。

69年版の「はじめに」と「教育課程」の項から、伝統的な英語科教育からの転回を示した二箇所を引用する。

○人間は活動を通して学ぶ。(中略)つまり人間はイニシアティブをとった時に理解したことを最もよく記憶するということである。よって教育における主要課題は、教師のパフォーマンスではなく、学習者にどのような学習経験をさせるべきか、ということである。着眼点を指導方法から学習経験へ移すと、現行のインターミディエイト部門における英語科教育を再評価する必要が生じる。この場合、スペリング、手書き、文法、作文、および文学のように、英語の学習項目を厳密に細分化するよりもむしろ、経験と表現を中心要素とするダイナミック＝動的なプロセスとは何かを考えることの方が、より生産的な取り組みとなる。<sup>(16)</sup>

○伝統的に英語科教育では、特定の技能の習得と文学遺産の継承が強調されてきた。技能の習得が学習者の正当な要求であることは、今でも変わらない。しかし、学習者が最もよく学習する時は(中略)ひとりでドリルなどの練習問題を解く時ではなく、学習者みずから学習は必要だと理解した時である。だから教師は学習者の態度に注意を払い、必要な時に必要な援助を学習者に与

える。

上記の通り、69年版はダイナミックなプロセス（a dynamic process in which experience and expression）を重視した。ダイナミックイングリッシュを標榜したのである。ダイナミックなプロセスの重視は、活動を通して効果的な学習ができ、学習者自身が主導する学習が理解を定着させるという研究成果を根拠にしている。いわば、学習者発見の原則に従っているのである。

学習効果を高める教授行為は、ドリルなどの練習問題を解かせるやり方ではなく、学習者自身が学習が必要だと理解できるやり方であるという。そのため、授業者は学習者の態度から判断して、必要な支援をするべきだというのである。

ダイナミックイングリッシュは次の二つの特徴をもっていると考えられる。

- 1 ダイナミックイングリッシュは、「スピーキング、手書き、文法、作文、および文学」のような英語の学習項目に対立する概念である。従来の読み書き文法の学習を静的とし、それに対立する動的な学習としてダイナミックイングリッシュは提案されている。
- 2 ダイナミックイングリッシュでは、授業者は主導するのではなく、学習者の学習経験をコーディネートする。授業者は、どう指導するかよりも、どのように学習経験をさせるかに焦点を移す。

特に、2点目の特徴は、次のように、77年の改訂でも強調されている。

○言語の育成の初期段階は、理論よりも実践を中心にする原理を反映させるべきである。現実離れした形式的な練習、あるいは教師主導で進める文学批評中心のディスカッションに傾倒するよりもむしろ、目に見える形で、教室での授業の半分以上を、学習者各自が積極的にリーディングやライティングを行うような機会にする。<sup>(17)</sup>

87年版も、次のようにダイナミックイングリッシュを重視し、用語としても明記している。

○「ダイナミックイングリッシュ（= dynamic English）」の授業は、社会の縮図であると同時に、社会の一部でもある。文学やメディアによって他者の経験を自分のことのように体験することで、見いだせる学習の価値は高まるのである。<sup>(18)</sup>

このように、ダイナミックイングリッシュの重視は、69年と77年の改訂から87年版に継承されたものであった。

この考え方は、マクルーハンの方向付けに基づいて作られた。

「壁のない教室」において、マクルーハンはこう述べている。

○学生の関心が焦点となっているところというのは、問題と関心事の解明に向かう自然な出発点である。教育の目的とは、認識の基礎的な手段を備えつけるだけでなく、日常の社会体験についての判断力と識別力を育成させることなのである。（中略）日常的なことと情報について、判断力があり識別力がある存在であるのが、教育を受けた人間の証左である。<sup>(19)</sup>

マクルーハンは、主著『メディアの理解』（1964）の最終33章「オートメーション 生き方の学習」<sup>(20)</sup>でも「伝統的で専門主義的な教授法と教授内容は時代遅れで終わりを告げた」と主張した。

以上のように、87年版は、69年版・77年版を継承している。これらの動向は、マクルーハンのメ

ディア理論を思想的基盤として、教育プログラムが受けとめたのだと考えられる。

(2) 言語教育の教育目的を「自己の形成」と「アイデンティティーの形成」に置いた

では、ダイナミックイングリッシュを教授行為として、何を教育目的とするというのか。

69年の改訂は、教育目的を「自己の形成」、「コミュニケーション力の育成」だとした。これを境にして、英語科教育は言語によって人間形成をするように、次のように方針を変えたのである。

○焦点は「英語とは何か？」ではない。(中略) インターメディアイト部門では、英語はもはや単一の学習科目という扱いではない。英語は、個人の自己の形成、および人間として必要なコミュニケーション力の育成と密接に関わる一つのプロセスであると考えられる。(21)

77年の改訂は、この方針をさらに明確にし、「言語によって、社会認識、自己認識をする」という言語観および言語教育観を示した。これによって、77年版は69年版よりも社会性を強め、教育目的としてアイデンティティーの形成を打ち出し、用語としても記述した。77年版の「全般の目標」から2項目を引用して示す。

○1. 各自が、個人および社会の目標を理解し、主導権、責任感、決断力、自制心、洞察力、誠実さなどの品性を習得するため言語を使うことを奨励する。

2. 個人のアイデンティティーを自覚し、理解するよう学習者を育成する。カナダの多文化社会やカナダ文学に見受けられる多種多様な人についての多様な価値観を自覚し、理解するよう学習者を育成する。(22)

以上、学習者発見の原則に立つダイナミックイングリッシュによって、自己を形成し、アイデンティティーを形成するのは、69年・77年の改訂で打ち出された方針であった。この方針は、87年の改訂でも継承されていった。

## 5. 1980年代における指導指針と学習指導要領の発展

(1) メディアを言語としてとらえたのは、84年指導指針からである

69年版および77年版に対し、87年版はメディアの理解に大きな違いがあった。メディアを言語としてとらえるか否かの違いである。

メディアを言語としてとらえた記述は、84年の「基礎コース用指導指針（低学力者対象）<sup>(23)</sup>」に始めて現れた。次の通り、p. 50-56に「メディア」の項を設けたのである。

84年：基礎コース用指導指針の目次

謝辞	2page	はじめに	3	教員のQ & A	4
小グループ学習	6	作文	10	言語学習	24
戯曲	41	詩	45	メディア	50
		リサーチ活動	57	評価	63
		リーディングの提案	70		

メディアの項を設けた背景には、カナダ人が視聴するメディア作品のほとんどがカナダ国外で制作され<sup>(24)</sup>、現在もアメリカ製番組が70%を占める(1995年)<sup>(25)</sup>といった社会環境およびメディア環境がある。次の「メディア」の項の記述により、学習の焦点がどこにあるかが分かる。

○学校はこれまで、文学と印刷物のリテラシーに重点を置いてきた。しかし、電子メディアの出

現に伴い、新たな文化が誕生した。この文化は、書籍文化よりもはるかに多くの人を巻き込み、影響を与えている。つまり、学習者は現在、2種類の全く異なる性質の教育課程を経験していることになる。1つは学校での教育、もう1つはメディアによる教育である。教師は、学習者がマスメディアに対して、賢く対応できるようサポートする義務がある。<sup>(26)</sup>

マスメディアが大きく影響を与える大衆社会で、言語で世界を認識し理解するには、メディアを言語の中に入れ込んで1領域として扱うのが必然となったのだと考えられる。

カナダは、このようにいち早くメディアを言語として位置づけた。それができたのは、マクルーハンによる思想的基盤があったからである。さらに、69年版・77年版の学習指導要領が示した、言語で社会を認識して自己を形成するという言語観、言語教育観の継承があったからだと考えられる。「壁のない教室」において、マクルーハンはメディアを新しい言語だと主張し<sup>(27)</sup>、次のように学校以外にマスメディアという二つ目の学校があり、教育はメディアを扱うのが必然だと提案した。

○今日、都市においては、多くの学習は教室の外で行われている。印刷物、雑誌、映画、テレビ、ラジオで送られる情報量は学校の授業と教科書が送る情報量をはるかにしのいでいる。<sup>(28)</sup>

また、マクルーハンは、アメリカメディアの膨大な量と、カナダに与える影響の質について、最初の単著『機械の花嫁』（1951）<sup>(29)</sup>で指摘している。



<図1>

同書49章「アメリカ的自由<sup>(30)</sup>」は、モーター・オイルのアメリカ企業の広告を組上に載せている。<図1>が広告の現物であり、アメリカ文化の一つの典型が描かれている。マクルーハンは、カナダと異なるアメリカ文化の侵入を論じたのである。

マクルーハンが『機械の花嫁』で重視した見方・視点はメディアからの直截なメッセージやねらいを読みとるよりも、メディアの背景のイデオロギーや価値観を読みとる方であった。このような見方・視点を教育プログラムに受け入れたの

が、87年版学習指導要領であった。

### (3) 87年学習指導要領による「メディア領域」導入

メディアリテラシー教育の教授行為（holistic reading）および教育目的

87年版の「ビューイング：メディアリテラシー」の節には、メディアリテラシー教育の教授行為についての重要な記述がある。

○それぞれのメディアの形式により、ビューアー（見る者）に対する要求は異なる。動きのあるメディアに対しては、多くの特定のディテールを再構造化するために素早い全体的理解（ホリスティックリーディング holistic reading）が必要である。静止したメディアに対しては、その構図や視覚メディアの選択などの限定した側面について、より思慮深い理解や考えをめぐらすための時間が必要となる。<sup>(31)</sup>（傍線は筆者が付した。）

「ホリスティックリーディング」という用語は、87年の学習指導要領ではじめて登場した。87年版はメディアリテラシー教育の教授行為として、ホリスティックリーディングという全体的理解を重視したと考えられる。ホリスティックリーディングはダイナミックイングリッシュ<sup>(32)</sup>と同様に、静的でドリル中心の読み書き文法の英語学習に対立する概念である。

また、ホリスティックリーディングによる、メディアリテラシー教育の教育目的も次のように記述されている。

○メディアリテラシー教育では、学習者を技術用語で圧倒せず、(中略)学習者が自己のビューイング習慣を意識できるようにすべきである。そうすることにより、今言われる情報時代において自己の人生設計を補助する技術と知識を養うことになる。<sup>(33)</sup>

ホリスティックリーディングでは、学習者はメディアリテラシー教育の学習経験を意識することが重要である。この学習経験によって、「自己の人生設計」とある通り、自己の形成という教育目的を果たしていくわけである。

87年版の冒頭に近い「文学とメディアの重要性」の節では、「メディアリテラシー」の項を設けて、メディアリテラシー教育を言語教育に位置づけて教育目的を次のように示している。

○本コースでは、映画、ラジオ、テレビなどメディア業界を志望する者を育成するのが目的ではない。(中略)学習者は、メディアが何を、どのようにもたらし、どのような影響力をもつのか、メディアとメディアが発信するメッセージが人々の生活にいかに関与を与えるのかを知り、理解する必要がある。メディアではこれらを伝えなければならない。これらを伝えてこそ、メディアは、英語科および言語科の中にその地位を確立するのである。<sup>(34)</sup>

メディアリテラシー教育は言語教育であると明解に述べている。メディアを言語として、その言語で認識する学習経験をすることが目的だからこそ、言語教育、国語科教育であり、英語科教育課程に位置づけたのである。

また、87年版の全般の教育目的は「言語、文学およびメディアの知的な探究および、自己価値と社会価値を確立するのに果たす役割を理解する」ことだと明記されている。つまり、言語教育全般の教育目的として言語によって社会認識、自己認識を重視し、「メディア」は、メディアという言語の領域で、社会認識、自己認識をする役割をになっていたのである。

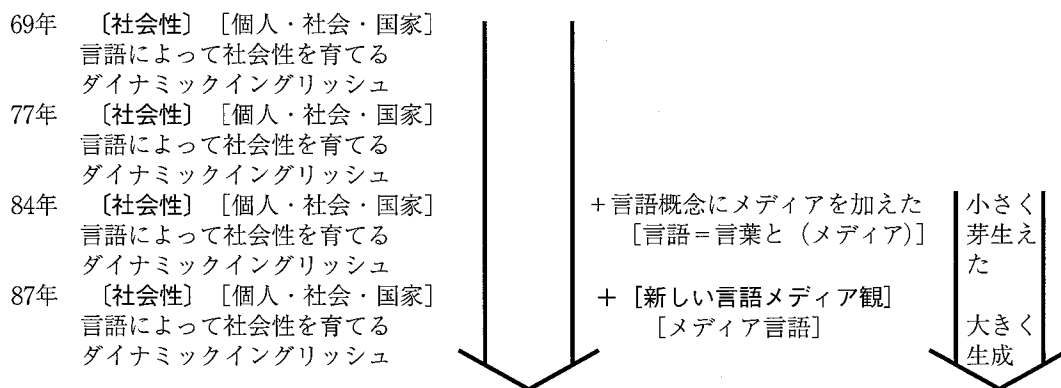
以上から、筆者は、87年版はメディア領域を、ホリスティックリーディングにより自己を形成しカナディアンアイデンティティーを形成する科目として規定したと考えている。

## 6. カナダのメディアリテラシー教育の発展

### (1) カナダの国語（英語）科におけるメディアリテラシー教育の生成と位置づけの過程

生成と位置づけの過程は、次のように図式化することができよう。





言語によって社会性を育てる言語観・言語教育観は継承しながら、84年には言語概念に「メディア」を加える言語観が芽生えた。さらに、87年には「従来の『言語』概念」とメディアとを含める「新しい言語メディア観」を提起している。こうして、メディアによって社会性を高めるメディアリテラシー教育が位置づけられたのである。

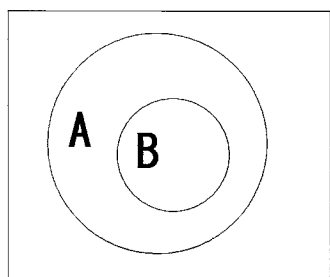
(2) 自己の確立とカナダ人の形成の統一

カナダのメディアリテラシー教育での学習者の学習経験は、次の2通りに分けることができよう。

第一に、「言語によって社会を認識し、自己を形成する」という言語観に支えられた、社会性と主体性を高めて社会生活に参加していくための学習経験である。これを、「A：自己の確立」のための学習経験と呼ぶことにする。

第二に、メディアリテラシー教育を支える「メディアは言語である」という言語観によって、アメリカとカナダのメディアが作る環境から、カナディアンアイデンティティーを形成しようとする学習経験である。これを、「B：カナダ人の形成」のための学習経験と呼ぶことにする。

以上を概念図として<図2>に示す。〔 〕内は、87年版学習指導要領に記載されているAとBにあてはまる用語である。



<図2>

A：自己の確立〔managing their own lives（自己の人生管理）、personal growth（個人の成長）、development of a positive self-concept（健全な自己イメージの確立）、self-exploration（自己探求）、personal values（自己価値）、personal well-being（人として健全になる）〕

B：カナダ人の形成〔appreciation of both personal identity and the diverse values …… in Canada’s multicultural society（個人のアイデンティティーおよび、多様な価値観を持つ人々、……つまり

カナダの多文化社会を理解する）、build a sense of identity, purpose（アイデンティティーと目的を得る）、national identity and unity（国家のアイデンティティーと統一）〕

『マッセイ報告書』（1951）やマクルーハンの理論の思想的基盤に立ち、教育施策や授業実践がおこ

なわれた。教育施策や授業実践より前に、思想が発達していたと考えてよいだろう。実際に、メディアを言語としたのは、マクルーハンは1950年代で、学習指導要領は1980年代であった。

しかし、「A：自己の確立」と「B：カナダ人の形成」の区分や関係についてはどうだろうか。筆者は、マクルーハンの理論はこの区分や関係を明確にしてはいると考えている。一方、1987年版学習指導要領には、「A：自己の確立」と「B：カナダ人の形成」を統一して教育目的を示した次の一節がある。

○学習者が（中略）知的好奇心と才能を伸ばす一方で、学習能力の上達だけを目的とせず、その才能をコミュニティや社会全体に還元し貢献するという意識が芽生えるようにする。<sup>(35)</sup>

この記述からは、教育の目的は、向上した自己の能力を社会に還元し貢献することにほかならない。この点で、「A：自己の確立」と「B：カナダ人の形成」は教育の出口で、ほぼ一体とすることが可能であろう。国語科教育の目標は、メディアリテラシー教育を位置づけることによって、「A：自己の確立」と「B：カナダ人の形成」を具体的な教育の次元において統一しようとしていると考えられる。

注(1) Ontario Department of Education. *English Intermediate Division*. 1969

(2) Ontario Ministry of Education. *Curriculum Guideline for the Intermediate Division English*. 1977

(3) Ontario Ministry of Education. *Basically Right: English Intermediate and Senior Divisions*. 1984

(4) Ontario Ministry of Education. *English Curriculum Guideline: Intermediate and Senior Divisions (Grades 7-12)*. Toronto: Queen's Printer. 1987

(5) 前掲 *Curriculum Guideline for the Intermediate Division English*, 1977. p. 13

(6) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 2

(7) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 19

(8) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 7

(9) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 33

(10) edited by Edmund Carpenter and Marshall McLuhan. *Explorations in Communication: An Anthology*. Boston: Beacon Press. 1960. pp. 1-4

(11) 前掲 *Explorations in Communication*. p. 2

(12) ジェローム・ブルーナー（1915年-）が提唱した、概念や原理を発達段階に応じて繰り返し学ぶ「らせん型教育課程」

(13) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 19

(14) 総務省メディアリテラシー教材「映像不思議シミュレーター」（監修 藤川大祐ほか1名、企画・制作 株式会社電脳商会）

(15) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 9

(16) 前掲 *English Intermediate Division*, 1969. p. 3

(17) 前掲 *Curriculum Guideline for the Intermediate Division English*, 1977. p. 8

(18) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 5

(19) 前掲 *Explorations in Communication*. p. 1

(20) Marshall McLuhan. *Understanding Media: The Extensions of Man*. New York: McGraw-Hill and London: Routledge. 1964. pp. 346-359

(21) 前掲 *English Intermediate Division*, 1969. p. 3

(22) 前掲 *Curriculum Guideline for the Intermediate Division English*, 1977. p. 5

- (23) 前掲 *Basically Right : English Intermediate and Senior Divisions*. 1984
- (24) いち早く、『ラジオ放送に関する委員会報告書』（Canada. *Report of the Royal Commission on Radio Broadcasting*. King's Printer. 1929）でも指摘されている。
- (25) 日本カナダ学会編『史料が語るカナダ—ジャック・カルチェから冷戦後の外交まで』有斐閣, 1997, p. 255
- (26) 前掲 *Basically Right : English Intermediate and Senior Divisions*, 1984. p. 50
- (27) 前掲 *Explorations in Communication*. p. 2
- (28) 前掲 *Explorations in Communication*. p. 1
- (29) Marshall McLuhan. *Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*. New York: The Vanguard Press. 1951
- (30) 前掲 *Mechanical Bride*. pp. 117-118
- (31) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 19
- (32) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 5
- (33) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 19
- (34) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 3
- (35) 前掲 *English Curriculum Guideline*. 1987. p. 15

<本稿の主な参考文献>

- ・ Barry Duncan. *Mass Media and Popular Culture*. Harcourt Brace. 1988
- ・ Barry Duncan. *Mass Media and Popular Culture Version 2*. Harcourt Brace & Company. 1996
- ・ Canada. *Report of the Royal Commission on Radio Broadcasting*. King's Printer. 1929
- ・ Donna Carpenter. *Media: Images & Issues*. Addison Wesley Publishers. 1989
- ・ Marshall McLuhan; edited by Eric McLuhan & Frank Zingrone. *Essential McLuhan*. Canada: House of Anansi Press. 1995. pp. 219-232
- ・ Marshall McLuhan & Bruce R. Powers. *The Global Village: Transformations in World Life and Media in the 21st Century*. Oxford University Press (Txt). 1989
- ・ Marshall McLuhan. "Canada: The Borderline Case" in *The Canadian Imagination: Dimensions of a Literary Culture*. edited by David Staines Ambridge, Mass: Harvard University Press. 1977. pp. 226-248
- ・ Marshall McLuhan & Quentin Fiore & Jerom Agel. *The Medium Is the Massage: An Inventory of Effects*. New York: Bantam Book. 1967
- ・ Marshall McLuhan. *Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*. New York: The Vanguard Press. 1967
- ・ McLuhan, M. *Conversation with McLuhan (by Stearn G. E.) in Encounter*, vol. XXVIII, no. 6. 1967. pp. 50-58
- ・ Marshall McLuhan. "Address at Vision 65." in *The American Scholar* 35. 1966. pp. 196-205
- ・ Marshall McLuhan & Quentin Fiore. *War and Peace in the Global Village: An Inventory of Some of the Current Spastic Situations That Could Be Eliminated More Feed forward*. New York: McGraw-Hill, 1968
- ・ Marshall McLuhan. *Understanding Media: The Extensions of Man*. New York: McGraw-Hill and London: Routledge. 1965
- ・ Marshall McLuhan. *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. Toronto: The University of Toronto Press and London: Routledge. 1962
- ・ McLuhan, H.M. *Report on Project in Understanding New Media*. The National Association of Educational Broadcasters. 1960. pp. 1-4
- ・ edited by Edmund Carpenter and Marshall McLuhan. *Exploration in Communication: An Anthology*. Boston: Beacon Press. 1960
- ・ Ministry of Education. *Media Literacy Resource Guide: Intermediate and Senior Divisions*. Toronto: Queen's Printer. 1989
- ・ Neil Andersen. *Media Works*. Oxford University Press. 1989

- 
- ・ Ontario Department of Education. *Living and Learning: The Report of the Provincial Committee on Aims and Objectives of Education in the Schools of Ontario*. 1968. p. 92.
  - ・ *Royal Commission on National Development in the Arts, Letters and Sciences*, 1949-1951, Report. 1951 (often referred to as the "Massey Commission")
  - ・ 上杉嘉見「カナダ・オンタリオ州におけるメディア・リテラシー教育の発展過程—社会批判的カリキュラムの追及と限界—」『教育学研究』第71巻第3号, 2004, pp. 318-319
  - ・ 宮澤淳一『グレン・ゲールド論』春秋社, 2004, p. 439
  - ・ 門林岳史「アメリカのデューライン：マクルーハンとカナダ」日本カナダ学会第30回年次研究大会口頭発表原稿, 2005年9月17日